

令和6年度 岡山一宮高等学校 学校経営における具体的な取組

(1)SSH事業の推進（総合評価： A ）

R7.3.4

担当		各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具 体 的 な 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	中間期から期末までの取組結果	結果分析と課題およびその改善策	関係評価
I 卓越探究推進PT		生徒がICを意識して探究活動に取り組むことで、高校3年間でICを身につける事ができる。 3年間の見直しをもったiCアカリキュラムの開発を行う。	IC課題探究α（普通科2年生） ・クラスルームだけでなく、ポータルサイトを利用することで、様々な探究に関する情報を一元集約できた。また計画的な探究活動の実施に生かすことができた。 ・生徒らの探究活動に対して、どのように教員側が指導を入れていくかについては工夫の余地がある。指導記録などの作成を行い、適切な引継ぎが行われるようにしたい。 iC理数探究Ⅰ（理数科2年生） ・「研究記録 自己評価表」「理数探究の記録」の取組みは、主体的な態度の養成に関しては効果的な取り組みであるが、生徒の目標管理と自己評価、教員の助言が主となっているため、評価に関しては課題がある。ルーブリックを用いた形成的評価を繰り返し行うシステムが構築されれば、さらに充実した探究活動になると考えられる。 ・卒業生を中心とした大学関係者との連携については、具体的な方策を改善する必要がある。例えば、本校を卒業する卒業生に対し、卒業前に大学進学後の協力体制を紙面で具体的にお願いをしたり、同窓会総会等で具体的な助言方法や協力体制などを紙面で紹介したりする必要がある。 ※1年生の探究活動を統括する部署は今年度より新設。	2、3年生で行っている探究活動を充実させるとともに、SSH第Ⅴ期で実施する3年間の探究活動を作成する。特に第Ⅴ期1年生で実施予定の「iC融合探究」の内容を策定するにあたり、現行プログラムでの課題を再度精査し、改善点を明確にする。現プログラムにおける課題については、これまでの実施状況や生徒・教員からのフィードバックを基に、以下の項目を中心に分析を行う。 1.プログラム内容の適切性 生徒の探究心を十分に引き出せているか、プログラムの内容が効果的に設計されているか。 2.実施環境とサポート体制 教員の指導体制、設備の充実度、生徒の自主探究に対するサポートが十分であるか。 3.成果の評価方法 生徒の成果を適切に評価できる評価基準の確立と、そのフィードバックが行われているか。	1年生探究活動(1年生普通科・理数科) ・探究活動に係る取組を実施し次年度のカリキュラムを作成する。 iC課題探究α ・研究活動を通して、自然現象や社会現象を発見し、課題解決につながるアプローチの方法が身につけている。また、研究活動を通して、探究的な態度と創造的な能力が身につけている。 iC理数探究Ⅰ ・研究活動を通して、様々な事象や課題に主体的に向き合い、粘り強く考え行動し、課題の解決や新たな価値の創造に向けて積極的に挑戦しようとする態度や探究の過程を振り返って評価・改善しようとする態度及び倫理的な態度が身につけている。大学との連携ができており、専門的な助言や指導ができる体制が作られている。 評価Aの基準 コンピテンシー5つの資質能力の4月～12月の実習について A:下位尺度15項目すべて伸びている B:10点それぞれの平均値が伸びている C:平均値でどれかが下がっている	SSH第Ⅴ期に指定されている先進校について以下の情報を収集した。「第Ⅳ期」と第Ⅴ期の違い」「探究活動の特徴」「探究活動の評価方法」また、探究活動等実施後の本校生徒のアンケート分析を行った。その結果、課題として次のものが明らかになった。 1. プログラム内容の適切性 現行プログラムにおいて、生徒の探究心を十分に引き出すことを目指してきた。2年生の振り返りの記録から次のような記述が複数あった。「自分で調べる楽しさを初めて感じた」「問題を自分で定義し、それに対してデータを集め、答えを導き出す過程が面白い」 2. 実施環境とサポート体制 普通科は課題研究専用のクラスルームを作成し、生徒の研究に対して教員のフィードバックをデジタルで残すようにしている。理数科では探究の時間の最後に各分野内で生徒が取組の報告を行っている。生徒からは「自分のアイデアに対して複数の先生から具体的なフィードバックをもらえる機会が増えた」との声が多く寄せられている。また理数科では「先生がアドバイスをくれることで、どの方向に進めば良いか明確になった」という意見が複数あり、サポート体制の効果が感じられていた。その一方で、生徒間の質問力の向上に課題が残る。自身の研究だけでなく、他者の研究に対して関心を持ち、研究の視点から質問ができる生徒の育成ができる取組が必要である。 3. 成果の評価方法 フィードバックの充実度も向上し、授業内での口頭フィードバックや評価シートの記入を通じて、生徒自身が自己評価を行う機会も増えた。教員の記録によると、フィードバックを受けた生徒の80%が次の課題に取り組む際に具体的な改善策を提示できており、評価基準が学習プロセスに貢献していることが分かる。iCルーブリックと探究8段階が同時に生徒に示されているが、これが生徒に混乱を招く要因となっていることが判明した。具体的には、生徒がどの基準を重視して学習成果を評価すべきかが不明確であり、両基準が異なる達成要件として認識されていることが問題となっている。	B	1年生探究活動 ・令和7年度から実施するiC融合探究の全体計画が完成した。現在、授業用ワークシートと教員用指導案を作成中であり、令和6年1月末に第1案を完成させ、卓越探究推進プロジェクトチームで検討し、2月末までに最終版を完成させる予定である。 iC課題探究α ・最終発表は1月24日に理数科と合同で実施した。研究内容を振り返り、3年生での進路決定につながる取組となったと考える。 ・高校生による岡山の歴史・文化研究フォーラム研究発表、全国高校生フォーラムポスター掲示、高校生夢育PBLフォーラム2024ポスター発表、探究活動プレゼンテーションアワードポスター発表など外部での発表にも積極的に参加した。（延べ20名以上が参加） iC理数探究Ⅰ ・中間報告会Ⅱ（10月29日）、分野別発表会（12月17日）を実施した。1月14日に分野の代表者による校内発表会を実施した。 ・報告会、発表会では生徒が積極的に質問する姿が増え、論理的に回答できる生徒が増えた。 ・「研究記録 自己評価表」「理数探究の記録」の実践を毎時間行うことで、研究を深めることができた。 ・放課後に自主的に研究する班が増え、放課後も研究をサポートする教員が増えた。 ・主体的に大学と連携し、研究する班も見られた。	各学年のコンピテンシー下位尺度すべての項目で伸びが見られたことから、iCを育成することができたと判断できる。（※補足資料） ルーブリックで最上位段階に達した生徒の割合も増加した。 2年生普通科 4月1%～7% ⇒12月10%～16% 2年生理数科 4月0%～7% ⇒12月7%～19% 「自分の限界に挑戦しようとする」の項目で最上位の段階に達したと回答：2年生普通科16%、2年生理数科19%	A
		探究の学びを校外に拡げるプログラムを開発することで、iCの育成を通して探究力を備えた人材を育成する。	旧サイエンスPT ・昨年度に引き続き、参加生徒の評価が高かった岡山理科大学研修と東京大学の研修を実施した。今年度は新たな取り組みとして、生徒から研修内容を募集し、研修先を決定・実施をした。参加生徒の感想も全員が肯定的なものであり、来年度も引き続き、実施をしていきたい。 ・新型コロナウイルスが落ち着き、対面での学会発表やコンテストが増えている。限られた予算の中で生徒が課題研究の成果を発表できる機会を増やしていくために、オンラインで発表できるコンテスト等を新たに見つけていく必要がある。 旧コンソーシアムPT ・「子ども実験教室」や「親子わくわく教室」には、今年も多くの生徒が参加希望を出るなど、プログラムとして定着していることがうかがえる。参加した生徒は、小学生に丁寧に対応し、世代を超えた交流を経験できている。 ・今年度は昨年度に引き続き高松農業高校と新たに岡山東商業高校と連携できた。学校間で研究の時期がずれるため、共同研究を進めることは難しい。今年度は、研究について専門科高校からアドバイスをいただいた。 ・県下ユネスコスクール各校のSDGsについての活動を共有した。他校の取り組みに対して積極的に質問したり、ワークショップで体験したりしながら、次年度に向けて協働できることはいかに協議する機会となった。 ・課題探究報告会、発表会には、今年度も多くの研究者を招聘することができた。今年度は新たに普通科課題探究スポーツ分野がスポーツアタリティス研究会において研究の成果を発表させていただき、新しい分野の多くの大学の先生方から指導助言をいただいた。また、大学生との活動においては、大学での学びにも触れることができ、探究活動の意欲を更に高める機会となった。 ・地域との連携強化においては、特に一宮公民館の行事に多くの生徒が関わることであった。様々な活動において、地域の方から直接のフィードバックをいただくことで生徒たちの動みにもなっている。	以下の取組を実施する。 1 先端研究所研修 2 学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム 3 小学校・中学校との連携 ・科学実験教室等の実施 4 専門科高校との連携 ・専門科高校と共同研究の実施 5 岡山市との連携 ・連携先の開拓 6 大学との連携 ・本校生徒の指導助言の依頼 7 研究者の招聘 ・研究者との連携 ・企業訪問研修の訪問先の開拓 ・地域（一宮公民館）との連携強化 8 サイエンスレクチャー ・研修等に参加した生徒が参加していない生徒に対して研修で学んだことを報告する。 評価Aの基準 上記取り組みに参加した生徒の肯定的意見が80%以上である。 科学オリンピック参加者数が100名以上。	以下の取組をこれまでの成果と課題を基に改善し、実施できている。 1 先端研究所研修 2 学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム 3 小学校・中学校との連携 4 専門科高校との連携 5 岡山市との連携 6 大学との連携 7 地域・企業との連携 8 サイエンスレクチャー 評価Aの基準 上記取り組みに参加した生徒の肯定的意見が80%以上である。 科学オリンピック参加者数が100名以上。	1. 先端研究所研修 研修を実施し、生徒が先端技術に触れる機会を提供。アンケート結果からは、参加生徒の90%以上が「最新の研究に触れることで、課題研究や進路選択に役立った」と回答。また、生徒が企画する研修では6本の企画応募があった。不採用であった生徒も「企画を作成する過程でどの大学でのどのような研究をしているのか詳しく調べることで研究に対する視野が広がった」との感想が見られた。探究活動に対する自覚性が育まれている。 2. 学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム 学会発表やコンテストに参加した生徒が、校外での活動を通じて自分の探究活動を発展させている。特に、学会発表に参加した生徒の70%以上が「自分の研究が他者にどう評価されるかを知り、改善点が明確になった」と報告。 3. 4. は未実施 5. 岡山市との連携 ユネスコスクールネットワークの学習会に参加した生徒は、地域課題に対して自主的な解決策を提案し、地域社会との連携を通じて実践的な学びを得ている。生徒の記述に「地域の実際の課題に触れたことで、社会貢献の重要性を感じた」というコメントがあり、探究活動が地域との繋がりを強めていることが明確になっている。また、その生徒が中心となり、普通科課題探究でも地域に出ていき、華道町商店街の活性化に向けての研究を行っている。 6. 大学との連携 連携を通じて、大学研究室での体験や講義参加が可能になり、高校生がアカデミックな探究活動に触れる機会が増加した。研修に参加した生徒の80%が「研究を見学することで、自分の探究をさらに深めるモチベーションが上がった」と回答。また校内の報告会に大学教授等を招聘して指導助言をもらった際の振り返りでは「大学の先生から直接フィードバックをもらい、今後の研究テーマをどのように展開していくかが明確になった」と複数の生徒が記述しており、具体的な成長が見られる。 7. 地域・企業との連携 生徒は企業訪問やインタビューを行い、社会で求められる探究力の理解を深めている。「実社会での探究活動がどう行われているのかを企業の担当者から学び、自分の研究に役立てたい」という生徒のコメントがあり、実践的な学びに繋がっていることが確認される。	B	1. 先端研究所研修 12月に生徒が企画した広島研修を実施した。実施後のアンケートでは、参加した生徒全員がコンピテンシーの育成に効果があったと感じると回答。「研究者の方との質問を通じて、技術的なことや研究者としてのあり方について知ることができた」と感想が見られた。 2. 学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム 科学オリンピックは、計102名参加。 3. 小学校・中学校との連携 社会貢献活動として馬屋下小学校と平津小学校で理数科1年生が科学実験教室を実施。また、本校で親子わくわく教室を実施。45組の申し込みがあり、その中から30組を対象にボランティア生徒31名が参加した。 4. 専門科高校との連携 岡山南高校課題研究「映像研究」講座と連携し、理数探究Ⅰ校内発表会YouTube Live配信を実施。 8. サイエンスレクチャー 各学期の始業式・終業式で実施。学会やコンテスト、先端研究所研修などに参加して得られた学びを全校生徒に共有することができた。	iCの育成については、I 卓越探究推進PTを参照。 取組に参加した生徒全員（100%）が肯定的な意見であった。また、iCについてはこれらの取組に参加した生徒のほうが伸びが大きい傾向にある。 参加生徒のiC推移（1年生） iC Ⅰ「論理的思考力」：4月2.86(2.84) ⇒12月3.58(3.45) iC Ⅱ「情報分析活用力」：4月2.96(2.88) ⇒12月3.50(3.37) iC Ⅲ「決断実行力」：4月3.10(2.94) ⇒12月3.58(3.43) （ ）の数値は行事不参加者の平均値	A
	SSH戦略室	国際性を身に付け、国を越えて課題解決を目指す意欲を育成する。	・令和5年度は1年生において、例年以上に外国の人と交流する機会を多く持つことができた。特に全ての生徒がプレゼンテーションを行う機会を持つことができたのは、非常に有意義であった。アンケートの結果からも、ほとんどの生徒が主体的に行事に参加しており、その結果肯定的な意見を述べていた。今後の課題としては、生徒がプレゼンテーションの内容について英語で質疑応答がしっかりできるよう指導していくことがあげられる。 ・新型コロナウイルスの影響は落ち着いてきたが、費用や実施のしやすさを考えると、オンラインでの交流が引き続き有効であると考ええる。 しかし一方で、現地に実際に行き対面で交流をしたいというニーズも増えてきている。慶南科学高校との対面交流が再開できれば理想だが、費用や相手の受け入れの都合から難しい面もあると感じる。 安定的に対面交流を実施するため、生徒のニーズを把握するためのアンケートを行い、新規に交流先を探すことも考える。	以下の取組を実施する 1 エレメンタリーグローバルプログラム（iCEGP） 2 海外との交流 3 理数探究Ⅰ英語発表 4 サイエンスレクチャー ・新型コロナウィルスの影響は落ち着いてきたが、費用や実施のしやすさを考えると、オンラインでの交流が引き続き有効であると考ええる。 しかし一方で、現地に実際に行き対面で交流をしたいというニーズも増えてきている。慶南科学高校との対面交流が再開できれば理想だが、費用や相手の受け入れの都合から難しい面もあると感じる。 安定的に対面交流を実施するため、生徒のニーズを把握するためのアンケートを行い、新規に交流先を探すことも考える。	1 エレメンタリーグローバルプログラム（iCEGP） ・1年生全体に対して実施する。 2 海外との交流 ・慶南科学高校とのオンライン交流を行う。 ・フィリピンや台湾、インドの中高生との交流プログラムを実施する。 ・海外研修プログラムの新規実施に向けて検討する。 3 理数探究Ⅰ英語発表 ・理数探究Ⅰの研究内容を英語で発表し、質疑応答を行うことができる。 評価Aの基準 1：留学生を複数回招聘し、指導を実施し、生徒が成長の成長を実感している。 2：国際交流プログラムに参加した生徒の80%以上が達成感を感じている。 3：英語発表において、聴衆に対して効果的にプレゼンテーションや質疑応答ができている。	1. エレメンタリーグローバルプログラム（iCEGP） 12月19日に実施予定。このプログラムは、国際的な課題に対する基礎的な理解を目的としている。生徒アンケート結果からは、事前説明会に参加した生徒の85%が「異文化に対する関心が高まった」と回答しており、参加への意欲が高まっていることが確認されている。 2. 海外との交流 ・フィリピン・オンライン留学 フィリピンとのオンライン留学プログラムが実施され、参加生徒全員から「おおむね満足している」というフィードバックが得られた。特に、オンラインでの英語でのディスカッションを通じて、生徒たちは国際的な課題に対する理解を深め、異文化理解のスキルを向上させている。また、参加生徒の95%が「英語でのコミュニケーション能力が向上した」と回答。生徒記述：「英語を使って異文化の人々と議論できたことで、自信がいった。今後、さらに国際的な課題に挑戦したい」というコメントが寄せられている。 ・台湾との交流 12月23日に実施予定 ・海外研修プログラム（オーストラリア） 新規の海外研修プログラムをオーストラリアで実施することが決定され、説明会が開催した。41名の申し込みがあり3月に実施予定。生徒や保護者から期待されている。	B	1. エレメンタリーグローバルプログラム（iCEGP） 1年生普通科を対象に12月19日に実施。生徒アンケート結果からは、多くの生徒が「もつと英語でコミュニケーションをとれるようになった」と「外国の人と英語で話ができ楽しかった」と回答しており、英語学習への意欲が高まったことがわかる。1月28日に1年生理数科を対象としたiCEGPを計画している。 2. 海外との交流 ・台湾国立竹北高校との交流 12月23日に台湾の高校生30名と2名の先生が本校を訪問し、書道や剣道などの文化体験を中心に交流を行った。参加した生徒は英語で話す力の不足なさを痛感しながらも、台湾の高校生とのコミュニケーションを楽しんだようである。また参加した全員が「決断実行力」が身についたと答えている。 ・韓国慶南科学高校との交流 2月13日午後、慶南科学高校とオンラインでの課題研究発表会を計画している。2年生理数科と普通科からそれぞれ2チームが課題探究で学んできたことを発表し、普通科有志生徒は日本文化や学校生活について発表する予定である。現在、英語での研究発表に向けて、校内外の指導者からアドバイスを受けながらプレゼンテーションの練習を進めている。 ・海外研修プログラム（オーストラリア） 6月2日から2週間、41名の生徒がオーストラリアのプリズベンに赴き、進学研修や理地の高校で授業を受ける予定である。生徒や保護者対象の説明会を開き、進学研修に向けて準備を進めている。	iCの育成については、I 卓越探究推進PTを参照。 希望者が参加する研修については、肯定的意見が100%である。また決断実行力が身についたと回答しており有効性を確認する事ができた。次年度は、一層の充実したプログラムをすることで、生徒のiCの育成を図る。	B

	IV 教員 研修PT	一宮探究型授業を推進し通常の授業と課題探究の活動をつなげることで、「探究の視点」を生徒に自然に身につけさせる。 ・探究型授業の実践に向けて、校内全体で組織的かつ計画的に取り組む体制作りを行うとともに、全教職員の授業スキルを向上させるとともに生徒のコンピテンシーの育成をはかる。 ・「探究6段階」を活用した授業を各教科で実践したり、「STEAMシラバス」を用いた教科横断的な授業を実施したりして、「一宮探究型授業」を確立する。また、様々な形態で校内外に公開することで、探究型授業実践の意識の高揚をはかる。	旧IALPT ・リフレクションシートは、生徒自身が学習に対する取組やできるようにしたこと振り返る手立てとして有効である。各教科(学年ごと)としてまとめられた結果をIALプロジェクトが分析するとともに、科目担当者が生徒の成長や課題について分析し、今後の指導に生かすように形骸化することなく、呼びかけていく必要がある。 ・教科横断型授業と「探究の6段階 岡山一宮高校Stairs MODEL」を活用する授業展開の研究は、第Ⅴ期の取組において重点項目になり得るので、指導普及を進めている。 ・互見授業の実施率の向上だけでなく、学校評価アンケートの「学校全体での探究型授業の工夫・改善への取り組み」の項目に関しては、7ポイントを超える高い評価であり、また「指導方法や評価の方法に関する検討や研修」の項目でも昨年度から＋0.1の6.4ポイントとなっており、学習指導の研鑽に取り組むことができた。また、目標である2回を超えて参観を実施した教員も昨年度の5人から13人へ大幅に増えており、研鑽の機運を高めることができた。しかし、達成率は目標の80%にはまだ10%届いておらず、今後も、より参加しやすい実施形態を検討していく必要がある。 ・互見授業と「いちのみや探究デー」の取組と連動する形で、教員の興味・関心を反映したテーマでかつ、課題点を見いだせる研修会を行った。 ・対面型に資することにより、直接校内外から貴重な意見をいただけるようになった。formでの回答収集は便利ではあるが、回答率が芳しくなく、呼びかけることにも限界があるようである。	・各教科の授業で「探究6段階」を活用した授業実践を呼びかけ、実践事例を蓄積する。 ・「STEAMシラバス」を作成し、それを用いた教科横断的な授業実践を呼びかけ、取組事例を蓄積する。 ・学期ごとに授業公開週間「探究ウィーク」を計画・実施し、その中で各先生方が研究した授業を「探究チャレンジ」して公開していただく。 ・年に数回「探究交流会」を計画・実施し、その中で各教科の実践内容を発表したり、多様な参加者を募って勉強会をしたりして、各先生方の授業のスキル向上を目指す。 ・年に1回「いちのみや探究デー」を計画・実施し、それまでに研究・実践してきた探究型授業を校内外に公開して、さらに広く授業力向上を目指す ・近隣大学と連携し、教員養成課程と現場との接続を図る。 ・「GSTおかやま」との連携を図り、小・中学校の探究力向上にも寄与する。 ※「GST」：コアサイエンスティチャーの略。岡山大学と岡山県教育委員会を主たる実施機関とし、理科教育を通して教育現場に貢献できる資質・能力を備えた小・中学校の教員を養成している。	1. 「探究6段階」を活用した授業実践 2回の教員研修会を実施し、「探究6段階」を活用した授業実践を推進。研修後の教員アンケートでは、「授業イメージが具現化されたか?」という質問に対し、88.4%の教員が肯定的な回答。具体的な授業実践が確認されていることが確認されている。生徒の振り返りからも「探究6段階を通して、課題を設定し、情報を収集・分析する力がついてきた」との記述が見られ、生徒の意欲が確認されている。 2. 「STEAMシラバス」を用いた教科横断的な授業実践 教員からは「教科横断型授業によって、生徒が学びの幅を広げ、より多角的に問題を捉えられるようになった」との声があり、事例の蓄積が進んでいる。生徒の振り返りの記述:「数学と化学を結びつけて考えることで、両教科の面白さを再確認した」「データの分析が他分野にも役立つことがわかった」とのフィードバックが得られ、教科横断的な学びの効果が確認されている。 3. 「探究ウィーク」の実施 教員からは「探究チャレンジ」に取り組んだ。公開授業に参加した教員から「自分の考えを発表し、他者の意見を取り入れながら探究する姿が印象的だった」との評価があり、探究型授業が進展している。また生徒の記述に「他の意見を取り入れて議論を深める力がついた」とあった。 4. 「探究交流会」の実施 参加教員からは「先生方の実践を参考に、授業を改善するアイデアが得られた」とのフィードバックがあり、授業スキル向上の機会となった。 5. 「いちのみや探究デー」の計画(11月6日～8日に計画) 6. 近隣大学との連携 近隣大学に探究交流会や探究デーの案内を送付し、教員養成課程との接続を図っている。大学側からも「現場での探究型授業の実践事例を共有することで、学生が将来の授業設計に役立てられる」とのフィードバックが得た。 7. 「GSTおかやま」との連携 探究交流会への参加やいちのみや探究デーで指導助言をいただきたい。	1. 「探究6段階」を活用した授業実践 探究6段階を活用した授業実践を多くの教科、科目で行った。授業実践事例は20集まった。 2. 「STEAMシラバス」を用いた教科横断的な授業実践 STEAMシラバスを活用した教科横断型授業に取り組む教員が増えた。令和6年度は9個の事例があり、ブログで公開している。 3. 「探究ウィーク」の実施 探究ウィークを実施し、各教員が「探究チャレンジ」に取り組んだ。前期に比べてチャレンジする教員が増えた。 4. 「探究交流会」の実施 各教科ごとや全体で複数回探究交流会を行った。 5. 「いちのみや探究デー」の実施 11月6日(水)～8日(金)の3日間で実施し、外部から108名の参加者があった。 6. 近隣大学との連携 近隣大学に探究交流会や探究デーの案内を送付し、教員養成課程との接続を図った。 7. 「GSTおかやま」との連携 探究交流会への参加やいちのみや探究デーで指導助言をいただいた。	10の育成については、I卓越探究推進PTを参照。 5. 「いちのみや探究デー」の実施 参加した校内外の教員の探究型授業実践の理解を深めることができた。また、探究型授業スキルの上昇につながっている。 ※授業参観を行った教員のアンケートの結果、「参考になった」という肯定的意見は83%であり、「探究型授業実践の意識が高まった」と回答した割合は78%であった。		
	V 評価・広報 PT	SSHの取組評価と研究開発成果の普及を行う。	旧検証評価PT ICアンケートの結果から、課題として情報分析活用力の数値が低いことが見られた。また、学年が進むにつれて肯定的な回答が多くなる傾向がみられる。学年進行につれてコンピテンシーが育成されているといえる。 5年間を通しての課題は以下の2点である。(1)3年生でのICの伸び悩み。(2)ICの5つの力のうち、「I 情報分析活用力」及び「II 論理的思考力」の2つの力が5年間で伸長しにくい傾向にある。 卒業生アンケートについては、今後どのようにしてアンケートの回収率をあげていくのが課題である。また、アンケートの実施時期、期間、間隔についても検討していく必要がある。 旧普及広報PT ホームページの情報量を増やしたことで本校SSHの取り組みがよく伝わるホームページになったといえる。来年度は学校ホームページが大幅に更新されるため、新しいホームページに適したページ内容を考えていかなければならない。 SSH通信については生徒の感想を増やしたことで、生徒目線で伝わる内容を盛り込むことができた。来年度は効率よく通信を作成していく工程を考えていかなければならない。	1. ICアンケートによる生徒の意欲評価 2. 卒業生アンケートによる卒業生評価 3. ホームページおよびSNSによる各取組の情報発信 4. SSH通信の発行 5. 研究開発実施報告書および成果物(普及用資料)の作成 1. ICアンケートを4月と12月に実施できる。 2. 対象とする期を限定してアンケートを実施し、回収率を昨年度より上げられる。 3. ホームページやSNSを活用した情報発信ができている。 4. 昨年度よりもSSH通信の発行数を増やすことができる。 5. 年度末に研究開発実施報告書および成果物(普及用資料)を完成させることができる。 評価Aの基準 A: ICアンケート回収率が90%以上SSH通信を30号発行する	1. ICアンケートによる生徒の意欲評価 4月に行ったICアンケートの回収率は90%以上であった。アンケート結果からは、論理的思考力が課題であると判断できる。 2. 卒業生アンケートによる卒業生評価 現在、卒業生アンケートの実施準備中です。卒業生が社会に出てからもICがどのように役立っているかを評価するための設計が進められており、10月に実施予定。またSSHの指定期間20年間の卒業生でGiniに論文が掲載されているかを調べた。 3. ホームページおよびSNSによる各取組の情報発信 ホームページにはSSH通信やサイエンスレクチャーの動画が掲載され、生徒や教員、保護者、地域社会に向けた情報発信が行われている。保護者面談等で「探究活動の様子がよくわかる」という意見を多数いただいている。また、探究ウィークや一宮探究デーの参加者の多くがホームページの情報をもとに申し込んでおり広報による情報発信に効果がある事がわかった。 4. SSH通信の発行 SNSではタイムリーに簡潔な能オプを伝えるのに対し、SSH通信はしっかりした情報載せるため発行に時間がかかる。生徒アンケートや取組の検証を行うと時間がかかってしまい、現在6月で更新が止まっている。 5. 研究開発実施報告書および成果物(普及用資料)は年度末完成に向けて作成を進めている。	1. 評価方法の改善 他校のSSH評価事例を参考にし、統一的な評価フォーマットを策定。次期の先導的改革期では3つのプログラムに対して3種類の評価検証方法を設定した。なお、ICアンケートの回収率は95%を超えている。 2. 広報活動の充実 ホームページやSNSを積極的に活用し、情報発信を強化した。SSHのブログ投稿数は90件を超えており、この数字は他校と比較しても突出した投稿実績となっている。この活発な情報発信は、本校のSSHの取組が極めて積極的に展開されていることを客観的に示すデータとなっている。このように充実した情報発信を通じて、本校のSSH活動の実態を広く社会に伝えることができている。また、大学への直接訪問を実施し、教授間のみならず、大学生・大学院生に対しても本校の取組を直接説明する機会を得ることができた。これらの活動を通じて、特に探究活動の成果を外都へ効果的に発信することができた。その一方でSSH通信が15号で止まっている。	1. 評価 取組評価により一定の成果を確認できたが、現状の評価基準では、生徒個々の特性を適切に評価できないケースが見られた。この課題に対応するため、個別プロジェクト評価やグループ評価など、より柔軟な評価方法を新たに導入する予定である。 2. 広報 いちのみや探究デーは100名を超える参加者が集まり、広報活動が成果を上げたという評価できる。大学生・大学院生の参加が増えただけでなく、県外の高校からの参加者も多く見られた。アンケート結果には好意的な意見が大半を占めていたことから、次年度以降の継続的な参加や、参加者の後輩たちによる将来的な参加につながることを期待される。 ホームページやSNSを活用した情報発信を行うことで、研究成果の普及につなげることができた。		
UNESCO係		外部機関・内部他分掌と連携しながら、校内でのESD(SDGs)を周知し、生徒の社会貢献への意識を醸成する。	・2年課題探究を中心に、日々の取り組みとSDGsを結びつけ、より自分事として課題解決に向けての意識付けをする必要がある。 ・他分掌、校外機関と連携することで持続可能な環境作りを一層進化させる必要がある。	・岡山市や地域公民館、近隣小中学校との連携。 ・課題探究との連携。 ・ユネスコ・SSH委員会やユネスコ部等の活動を全校に発信し、周知させる。	・委員会や部としてユネスコの啓発活動ができる。 ・SDGsについて2年生が自分事ととらえ、17の項目のうち1つは「説明できる」と答えることができる。 A基準: LHRで委員会主催の活動ができる。委員会、部のニュースレターが4号ずつ発行できる。2年生85%がSDGsについて「説明できる」と答えることができる。	・ザ☆キッズ(8/1,8/4,8/9)、防災ボラ(7/27)、パソコン教室(8/6)、親子わくわく教室(10/26)等々、岡山市、一宮公民館、近隣小中学校との連携事業について、SSH尖った人材PTや2年生課題探究と協働して計画的に実施することができ、生徒は意欲的に参加した。 ・ユネスコ委員会、ユネスコ部のニュースレター等により、生徒の社会貢献の意識を高める工夫が必要である。	・9月銀杏祭では、シトラスリボン作成活動に取り組んだ。 ・10月には、各クラスのユネスコ委員が中心となり、社会貢献活動を計画し実施した。 ・11月には、学校近隣のエコイト岡山北店を訪問しフードロス削減につながる取組を学び、岡山県下ユネスコスクール11校が集まる実践交流会で活動発表を行った。	・ユネスコスクール加盟校として、委員会の活動を通して、学校全体の取組を果たすことができている。また、部活動として部員1名ながらも県内のユネスコスクール実践交流会に参加することで、他校との交流を通して刺激を受け新たな視点を持つことに至っている。 ・1年時のICE授業(SDGsポスターセッション)などの取組を通して1年生2年生全員がSDGsを自分事として捉え、説明することができる状況にある。 (課題および改善策) ・自分たちの活動がユネスコスクールとしてどうい関わりを持っているのかという意識付けが不十分である。ユネスコ委員会、ユネスコ部のニュースレターが今年度一度も発行できていないことがその原因として考えられる。次年度は自分たちの活動の意義をニュースレターによって全校生徒に伝えていく必要がある。	

(2) 学力向上とキャリア教育の推進 (総合評価: B)

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況(課題)と改善の方向性	具体的方策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	中間期から期末までの取組結果	結果分析と課題およびその改善策	最終評価
教務課	・昨年度同様、新入生に向けて新学習指導要領の3観点による評価と評定の付け方の基準を周知する。 ・教科ごとの、観点Ⅲの評価方法について教科の取組を集約し共有する。 ・特別活動の年間指導計画を取りまとめ、学年や課教室等の特別活動が円滑に行えるようサポートすることで、生徒のキャリア教育の推進を図る。	・昨年度同様、新入生に向けて新しい3観点による評価と評定の付け方の基準を、1学期末に、1年生とその保護者に提示することができた。 ・教科主任に依頼して、観点Ⅲの評価方法について教科の取組を集約することができた。 ・評価基準とした学校評価アンケートの項目がが昨年度を上回り、A評価の基準を満たすことができた。 【改善の方向性】 ・引き続き、評価と指導の一体化に向けた情報発信を行う。	・新教育課程の3観点による評価と評定の付け方の実践例を集約し情報発信する。(12月研修予定) ・特別活動計画を定期的に周知するため、課教室、係、学年への連絡、生徒主体の計画作成の依頼し計画の修正などの取りまとめを行う。	・指導と評価の一体化により、生徒の成長を継続的、段階的に支援することができる。 評価Aの基準 ・学校評価アンケート12T12の評価指数が昨年度を上回っている。	・成績の付け方の基準を、1年生とその保護者に提示した。(7月)学習状況調査4月と8月を比較すると、「自宅学習をしていない」と答えた生徒の割合は11%→4%へと減少し、「家庭での学習を開始する時間」について、決まった時間に学習を開始すると答えている生徒が53%→68%へと増加しており、家庭学習の定着への働きかけに繋がっていると考えられる。 ・教科主任に依頼して、観点Ⅲの評価方法について教科の取組を集約する予定として呼びかけを行った(7月)。 ・特別活動について、具体的な方策の通りサポートを行い、ここまで大きな問題なく実施することができている。2年生では評議員を中心に学年の特別活動計画を作成するなど、生徒の主体性を育成に繋がっている。	B	学力向上に向けて、基礎学力を定着させるため次のような取組がみられた。 - 定期的な学力テストや確認テストを実施し、基本事項の定着状況を把握する。 - 授業の冒頭で小テストや復習問題を取り入れる。 - 各教科で学習目標(めあて)を明確にし、指導計画に基づいて進める。 - 必要に応じて個々の生徒に対応した指導を行った。 学校評価アンケートでは、上記に該当する項目において、保護者・生徒とも例年並みの評価指数、もしくは微減となり、取組そのものの検証を必要とする結果となった。 学校評価アンケート3年間(R4～R6)の比較分析 ・基礎的な教科指導は、教員・生徒評価は安定して高いが、保護者評価は減少傾向にあり課題である。(T: 6.7(R4)→6.7(R5)→6.7(R6) S: 6.8(R4)→7.0(R5)→6.9(R6) P: 6.1(R4)→5.9(R5)→5.8(R6)) ・個別対応の指導は、生徒評価が高く改善された。(S: 4.0(R4)→4.6(R5)→4.8(R6))	・当初目標の評価基準の周知、観点Ⅲの評価方法の集約、特別活動のサポートは予定通り行うことができた。 ・学校評価アンケート12T12の評価指数については、昨年と同様の数値であった。(6.4) ・研修機会は、教員評価は安定しているが、指導法や評価法に関する研修の効果には課題がある。(T: 7.2(R4)→7.0(R5)→7.1(R6)) 改善策は次のとおりである。 ・保護者評価の低下には、定期的なフィードバックと保護者とのコミュニケーションの強化を行う必要がある。 ・学力向上に向けて、生徒の実態・ニーズを把握し、教員間の情報共有を密に行うことが必要である。 ・次年度は授業評価方法を検討する。	B

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間期	中間期から期末までの取組結果	結果分析と課題およびその改善策	最終評価
進路指導課	①教科指導力を高めることで、生徒が第一志望校に合格できる学力を育成する。 ・共通テストで、全国平均を上回り、かつ6割以上をとれる教科指導力の充実 ②国公立大学推薦入試合格者数75名以上	昨年度の状況 ①文系平均535.7点(全国平均 -10.1) 理系平均 523.9点(全国平均 - 45.7) 今年度の3年生の状況 文型平均 465.5点(1,000点満点) 理系平均 459.7点(1,000点満点) ②国公立大学推薦入試合格者数76名 → 目標達成	・1年生入学時における丁寧な初期指導 ・授業、家庭学習を通した基礎学力の育成 ・中・下位層に対する学年主任面談、及び教科面談 ・岡山大学を中心とした入試問題の研究と、授業への反映 ・難関大学を目指す生徒への個別添削指導 ・全員体制での小論文・口頭試問指導 ・受験レポートの蓄積と活用	A評価 ①全ての教科で全国平均を上回る ②国公立大学推薦入試合格者数80名以上 B評価 ①半分以上の教科で全国平均を上回る ②国公立大学推薦入試合格者数75名以上	・1年生では導入期を丁寧に、学習への意欲付けを行った。また、各学年で模試分析を行い、反省と次回に向けての対策を話し合った。全体的に、上位が伸びて、下位が減少している。 1年スタサポ推移(1年4月→1年8月) 国語 S(8→32人)A(122→110人) C(45→26人) 数学 S(22→17人)A(140→80人) C(14→56人) 英語 S(7→11人)A(99→86人) C(39→26人) 2年スタサポ推移(1年4月→2年4月) 国語 S(6→23人)A(122→119人) C(53→18人) 数学 S(7→35人)A(123→115人) C(10→12人) 英語 S(10→24人)A(86→117人) C(36→19人) 3年生9月マーク平均点偏差値 理系の理科、数学②に課題がある。 6-9文系 51.6 (532.7点)、6-8理系 48.4(526.8点) 国語53.4、数学①50.4、数学②49.5、英語R 53.2、英語L 52.5、世探 53.1、日探51.2、地探52.4、公共52.4、理科基礎52.7、物理48.0、化学46.5、生物51.1、情報 51.3 ・岡山大学工学部(参加者22名)、九州工業大学(参加者16名)、岡山大学薬学部(参加者39名)の進学ガイダンスを行い、多くの生徒が参加し、進路選択の幅を広げた。	B	・1年生(45期) 7月記述と11月記述の成績推移 3教科 平均点偏差値 55.4→54.7 (SS70 5→9, SS65 14→13, SS60 46→36, SS55 84→89, SS50 107→87, SS40 54→79) 偏差値50付近の生徒が、下へ落ちている。超上位は増えている。 ・2年生(44期)7月記述と11月記述の成績推移 3教科 平均点偏差値 56.4→55.3 (SS70 8→8, SS65 20→24, SS60 71→41, SS55 69→72, SS50 66→85, SS35 55→71) 一年生同様に偏差値35～45の層が増えている。 ・3年生(43期)9月マークと11月マークの成績推移 6-9文系 532.7点(SS51.6) → 536.6点(SS50.5) 6-8理系 526.8点(SS48.4) → 539.6 (SS47.7) 全国平均以上 国語(SS51.6) 数学IA(SS50.1) 英R(SS52.6) 英L(SS52.2) 世界史(SS50.9) 日本史(SS52.9) 地理(SS51.4) 公共(SS51) 化学基礎(SS50.6) 生物基礎(SS52.0) 生物(SS50.4) 情報(SS51.9) 全国平均以下 数学IIB(C)(SS48.5) 物理(SS46.5) 化学(SS46.2) ・国公立大学KTなし推薦入試合格者数 37名/90 (文系5,理系12,理数科20) (昨年度43名/89 (文系9,理系16,理数科18) 内 岡山大学 15名(昨年度11名) 合37 (11M A1, B4, C8, D7, E17, #2) 不53 (11M A3, B3, C8, D8, E29, #2)	・1,2年生ともに、SS65以上の超上位層は微増しているが、SS50の層が、下に落ちてきて、SS45以下の層が膨らんでいる。 ・3年生は、6月の部活動引退後、気持ちを切り替えてよく頑張っている(2M 459.7点 6M 480.3点 9M 526.8点 11M 539.6点)。 ・共通テスト結果 文系611.7 理系569.1 共通テストで文系は6割を超えることができたが、教科的に見ると、6割を超えた科目は国語(133.2) 英語(132.0) 世界史(66.1) 公共(64.1) 情報(68.3) 生物基礎(31.4)で、6割に達することができなかった科目は、数学IIB(C)(46.4) 物理(49.7) 化学(36.8)であったので、理系科目に課題が残った。特に、成績下位層へのアプローチが課題である。 ・KTなしの国公立大学の推薦入試の合格者数は、全体では去年より少ないが、岡山大学の合格者数では上回ることが出来た。 合格者37名の成績を分析してみると、11月MでのD判定が7名、E判定が17名、岡山大学合格者数15名の内、D判定は3名、E判定は5名であった。DE判定からの合格者数が半数を超えている現状である。基礎学力をつけることを大前提にしながら、一方で推薦入試も使った受験戦略が、来年度以降も必須だと思う。 ・KTを課す推薦入試の出願者(予定を含む)が76名いるので、そこでの合格及び一般選抜の後期入試までしっかりと頑張リ、例年の進路目標国公立55%以上(170名)を達成したい。	B
図書課	・図書資料、図書館設備の活用を促進し、探究活動、キャリア教育を充実させる。	・前年度貸し出し冊数 5573冊(生徒・教職員全体) ・前年度貸出し利用率 1年生=56% 2年生=36% 3年生=39% 全 体=44% ・授業での図書館設備利用件数 10科目(現代文・古文・漢文・保健体育・情報・探究・書道、生物・家庭科、美術)	・生徒、教職員を対象に蔵書や設備を案内し、書籍や情報検索の支援ができることを紹介する。 ・生徒、教職員にアンケートを行い、必要図書のリクエストに応える。 ・図書館利用の授業実例を紹介し、授業での図書館設備利用を促す。 ・進路選択の参考となる図書や資料の利用を進路課と共同して促す。 ・県立図書館との連携(継続)	A評価 ・全学年で昨年度の貸し出し利用率を上回る。 ・生徒や教職員のよる、授業や課題探究で活用できる図書資料の充実 ・授業での図書館設備利用10科目以上 B評価 ・全学年での昨年度貸し出し利用率維持。 ・課題探究と連携した図書資料の購入 ・授業での図書館設備利用10科目	・貸出利用率ならびに貸出冊数(9/13現在) 1年生:91% 2年生:59% 3年生:32% 全 体:61% 貸出冊数(生徒のみ):2973冊(昨年同期時 2546冊) ・貸出利用率、貸出冊数ともに昨年度を上回り、授業での図書館利用も活発である。課題探究や進路探究の参考資料として活用する生徒も増加している。この利用率を維持しながら、さらに図書館資料を整えることで、生徒はもちろん教職員の探究活動の深化に繋げたい。	B	・本校HPに図書館ページを開設。HPから「蔵書検索」や「利用案内」、「開館日カレンダー」等の確認が可能となった。また、圖書の「調べ方ガイド」を活用し、図書資料を求めて来館する生徒が増えた。 ・新たに設置された図書館入口の書架により、新着図書紹介が図書館の外からも分かりやすくなり、図書館内に足を踏み入れる生徒の姿が増えた。 ・探究の実践例をはじめ、探究関連書籍を充実させることで、探究コーナーの整理をおこなった結果、方法論に関わる書籍に手を伸ばす生徒が増加した。 ・保護者の図書館利用を開始。10名の登録があった。	・貸出利用率ならびに貸出冊数(12/31現在) 1年生:94%(昨年度3月末56%) 2年生:63%(昨年度3月末36%) 3年生:41%(昨年度3月末39%) 全 体:66%(昨年度3月末44%) 貸出冊数(生徒のみ):3900冊(昨年同期時3547冊) ・授業での図書館利用:14科目・計125回(昨年度3月末10科目103回) ・教職員からの働きかけや図書委員会の啓発が功を奏し、図書館利用自体は活性化しているが、図書館利用が探究活動の深化に繋がられているかについては課題も多い。 (改善策) ・アンケート等を活用し、生徒や教職員の要望を吸い上げることで探究活動深化に繋がる情報提供の場としての図書館運営を工夫したい。 ・各教科や進路課、課題探究との連携を強化することで、書籍の有意性や図書館が多様な情報取得手段が用意されている情報取得に有用な場としての利用を促す。	B
情報管理係	・セキュリティの保たれたネットワークを維持する。 ・教員や生徒のChromebookの活用、授業等でのICTの活用の環境を整備することで、生徒の学習の充実を図る。	・図書館のChromebookについては、貸し出し状況、使用状況を考えて、図書館での生徒への貸し出しを中止した。これに伴い、Chromebook関連の貸し出しに関するルールの見直しを行った。 ・Chromebookの導入によるICT活用促進と合わせて、Windows機の更新や環境整備が必要である。 ・校内の行政系サーバーや学習系のファイルサーバーの廃止、ネットワークファイルサーバーへの見直しを行った。	・岡山県情報セキュリティ対策基準に則って本校の対策基準を見直し、運用実施を行う。 ・各教室等の学習系PCや周辺機器の管理、更新について検討を行いメンテナンスを行う。 ・Chromebookを活用した遠隔授業等に対応できるノウハウの提供を行う。	評価Aの基準: ・PC更新予定が達成され、校内のネットワークの運用ができた。 ・Chromebookが授業や校務で十分に活用されている。 評価Bの基準: ・Chromebookを含めてPCやサーバーの整備・管理・更新が行われた。	・Chromebookを利用することにより、授業のICT化がすすみ、生徒の探究的な取り組みの助けとなっている。 ・Chromebookの利用において、各種管理を行っている。故障時は職員室の予備機を生徒に貸し出し、修理対応としている。 ・行政用のPCは古いものから更新、Windows11への移行を予定しつつ、準備がすすんでいる。またはHDDをSSDに変更しつつある。	B	・授業のICT化がすすみ、生徒の探究的な取り組みの助けとなっている。 ・Chromebookの利用において、各種管理を行った。月初めにログインできない事象が多数発生した。月末に端末の認証を無線LAN側でやり直しているためと思われる。必要に応じて、対応マニュアルを印刷し対応した。 ・故障時の予備機貸し出しは、機器の管理面からメディア準備室へ移動した。 ・Windows11への移行のため、古い行政PC端末を順次更新した。	・Chromebookを含めてPCやサーバーの整備・管理・更新が行われた。PC更新予定は県のスケジュールに依存する。 ・情報セキュリティ内部監査があったが、順調に終了した。 ・Chromebookが授業や校務で十分に活用されている。授業でジャムボードの代替への移行は各自で実施している。 ・今後は、セキュリティ関連、Chromebook関係の研修の進め方を計画する。	B
主権者教育担当	・生徒の選挙や政治への関心を高め、政治的教養を育む。	・R5の学校評価アンケート生徒評価指数4.0。あてはまる、ややあてはまるの計が79.1%となっている。 ・R5年は岡山県において県議会議員選挙や市議会議員選挙があり、これに関連して授業でも話したことが数値の上昇につながったのではないかと考えられる。	・政治的教養を育む内容のLHRの企画・運営 ・選挙や政治への関心を高める働きかけ(ポスター掲示、終礼伝達を使って啓蒙する)	・「学校では、選挙や政治への関心を高めたり、社会問題について学ぶ機会がある」の生徒評価指数が4.0 評価Aの基準:生徒評価指数4.2	・LHRは2～3学期に実施予定である。 ・10月執行予定の県知事選挙に合わせて、成人年齢に達し投票可能となる第3学年に投票の仕方についてのリーフレットを活用した指導を行う。	B	・3年生は10月にLHRを実施。県から配布されたリーフレットをもとに投票方法などの指導を行った。 ・1年、2年は1月末に実施予定。県から提示されている教材を参考に担当者が教材を作成し、生徒の興味・関心が高まるように工夫をしている。 ・衆院選、県知事選が同日にあったため、ポスターが必ず3年生の目に入るように掲示したり、選挙管理委員長とどのようにしたら投票率があがるか話し、放送で呼びかけをするなど昨年度よりも力を入れて工夫して取り組んだが、生徒評価指数の伸びには繋がらなかった。	・生徒評価指数3.7。昨年度より0.3ポイントダウン。 (改善策) ・来年度は生徒課、選挙管理委員会とのさらなる連携をして、主権への関心を深めたい。 ・主権者担当教員連絡協議会で他校の取り組みを共有し、LHRの充実を図る。	B
1年団	「基本的学習習慣の確立」 ①予習・授業・復習のサイクル確立 ②家庭学習時間確保(平日180分、休日240分) 「進路実現に向けた適切な文理選択・科目選択」 ①分野別説明会の実施で大学のことを知る ②進路の方向性を決める		・授業に集中しやすい雰囲気を作る。 ・毎月学習実態調査を実施する。 ・模試の成績返却後、学年集会を行い取り組みへの振り返りと今後に向けての指導を行う。 ・担任面談の年5回実施。成績上位者、下位者に学年主任及び進路課で面談を行う。 ・大学に関する情報提供を行い、進路の方向を定めさせる。	・基本的学習習慣が確立している。→学習実態調査で評価 評価A・・・学習実態調査の週平均がいずれも180分 評価B・・・学習実態調査の週平均がいずれも160分 ・進路実現における適切な文理選択・科目選択に向けて、十分な情報提供や指導が行われている。→学校評価アンケートで評価 評価A・・・学校評価アンケートで肯定的評価が80%以上	・学習実態調査を毎月実施することができた。また模試や学習実態調査後に学年集会を行い、その都度フィードバックをしてきた。その結果、入学時には平日約120分、休日約170分の学習時間だったものが、第4回の調査では平日平均約160分、休日平均約220分と伸長し、生徒の学習習慣の定着や進路意識の向上が見られた。ただし学年の目標には少し届いていないことと、定期考査期間ではない時、特に休日の学習時間が少ないことが課題として残っているため、今後は具体的な学習方法、時間の使い方を含め粘り強く指導を続けていく。 ・文理・科目選択に向けて担任が面談を行っている。事前にLHRで進路課、教務課から選択に向けた情報提供を行うことができた。夏休みのオープンキャンパス参加や、今後の大学・学部調べ等を通じて、進路意識の向上を図ってきたい。そして1年終了時にアンケート調査を行い、この1年間で進路意識がどのように変化したかを調べ、2年時以降の進路指導、キャリア教育に活かしていきたい。	B	・学習実態調査を毎月実施することができた。また模試や学習実態調査後に学年集会を行い、その都度フィードバックをしてきた。その結果、入学時には平日約120分、休日約170分の学習時間だったものが、第8回の調査では平日平均187分、休日平均338分と今までの調査で最長となった。考査前ということもあったが、生徒の学習習慣の定着が見られた。今後は定期考査期間ではない時にしっかりと学習時間を確保すること、学習の質をあげること、そして課題や予習、復習以外の学習に目を向けられるような機会を提供していく。 ・学習時間について 学習時間の確保はされているが、課題を終わらせることや予習で答えを埋めることが目標となっている様子が見受けられる。今一度学年全体で課題や予習の意義を、各授業で伝えていく。休日や時間のあるときに何をしたいかわからないという生徒も一定数いるので、国政英を中心に個別添削等を行うよう依頼し、成績上位者のさらなる成績伸長を図っていく。 ・進路実現に向けて 学年集会や模試の振り返りを来年度も引き続き行い、生徒の意識を向上させる。 進路指導課と協力し、模試の成績に応じた声掛けを行い、特に成績下位者については約65%が成績を伸長させることができた。今後担任や進路指導課と協力し、きめ細かい声掛けや進路指導を行っていく。	A	

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況(課題)と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	中間期から期末までの取組結果	結果分析と課題およびその改善策	最終評価
2年団	①国数英を中心にした5科の学習習慣定着と学力の向上 ②志望校群の決定と大学の特色を知る	・1年生1月の学習実態調査では平日平均140.8分、休日平均190.9分 1日平均では国語27.7分、英語39.3分、数学86.5分であり、3教科で180分には至っていない。地歴・理科の平均学習時間は、合計で14分/日である。 ・進研模試では国数英総合全国偏差値は、7月54.0→11月54.6→1月55.8と上昇傾向である。一方、全国偏差値70以上が10名、80以上70未満が77名となっている。地方国公立大学合格一歩手前に大きな集団があり、難関大を目指す層もある程度存在している。 ・明確な志望校群が定まっていない生徒がいる。 ・学部は決まっているが、学科や専門内容までは決まっていない生徒が多い。有効な情報入手する術を知らない生徒が多いため、調べ方も教える必要がある。	①の具体的方策 ・国数英で毎日180分以上の学習時間を確保し、プラス地歴・理科の学習に取り組ませる。 ・個別に得意科目、苦手科目を把握し、個に応じた学習計画が自分で立てられるよう指導する。 ・成績上位者を対象に個別指導を実施して、難関大学に向けた学力向上をはかる。 ②の具体的方策 ・課題探究・進路探究での活動を通して、大学卒業後を見据えた自らの姿をとらえさせる。 ・全国の大学の情報等を収集し、岡山大学だけでなく、幅広い大学選択の視点を与える。 ・2年生3学期までに志望校群を決定させる。	「国数英を中心にした5科の学習習慣定着と学力の向上」 (学習時間の増加、成績上位層の増加) 評価B⇒学習実態調査(3回)の過平均がいずれも150分以上である。 評価A⇒学習実態調査(3回)の過平均がいずれも180分以上である。 「志望校群の決定と大学の特色を知る」 (志望校群が決まっている。大学について幅広く考えられている) 評価B⇒3学期志望校調査において、第一志望群が決まっている生徒が60%を超えている。 評価A⇒3学期志望校調査において、第一志望群が決まっている生徒が80%を超えている。	・成績上位層60以上の生徒は1年7月から2年7月にかけて約2倍に増加している。 国数英全国偏差値 70以上:1年7月3人,1年11月4人,1年1月10人,2年7月8人 60以上:1年7月53人,1年11月68人,1年1月87人,2年7月99人 50以上:1年7月231人,1年11月238人1年1月253人,2年7月254人 ・スタディサポート学習時間は4月から8月にかけて平日1.5〜3時間の割合が増加し、休日3時間の割合が増加している。また学習時間平日2時間、休日3.4時間の割合が多い。 2年4月 平日1時間18.4%,1.5時間16.2%, 休日2時間26.0%,3時間14.3%,4時間1.3% 2年8月 平日1時間15.2%,1.5時間19.9%, 2時間31.8%,3時間17.9%,4時間1.3% 休日1時間5.3%,1.5時間7.9%, 2時間19.2%,3時間28.8%,4時間18.5% ・志望校が決まっている生徒は80%に達していないが、2年4月から2年8月にかけて10%以上増加している。 スタディサポート学習状況「志望校が決まっている」12年4月44.4%→2年8月56.3%	B	・国数英全国偏差値 70以上:1年7月3人,1年11月4人,1年1月10人,2年7月8人,2年11月8人 60以上:1年7月53人,1年11月68人,1年1月87人,2年7月99人,2年11月73人 50以上:1年7月231人,1年11月238人1年1月253人,2年7月254人,2年11月230人 偏差値70〜80 2年7月29.4%→2年11月21.6% 8%減 偏差値60〜50 2年7月50.2%→2年11月52.2% 2%増 偏差値50〜40 2年7月17.8%→2年11月22.9% 5%増 70〜80の層が減少し、80〜50、50〜40の層が増加している。 ・11月学習実態調査の結果、学習時間の少ない科目(国語理系14分、地歴文系9分、化学理系11分、生物理系13分)があり、理系の学習習慣に不安が残る。 ・3学期志望校調査は、1月末を予定している。	・学習実態調査(3回)の過平均がいずれも150分以上であった。 ・学校評価アンケート(生徒)において、「進路決定に向けて情報提供や面談など、きめ細かい指導が行われている。」よくあてはまる、ややあてはまるの計88.2%である。 (課題および改善策) ・学習時間の少ない科目を中心に、学習習慣の定着を図っていき、3年時での全国偏差値 60〜50、50〜40の層を減少させ、70〜80の層の増加を目指す。 ・2年時で取り組んだ普通科I・理数探究α、理数科理数探究αで学んだプレゼンテーション、コミュニケーション力をいかして総合型、学校推薦型での合格を目指す。また、3年時での進路探究を充実させ、3年1学期で志望校が決まっている状態を目指す。	B
3年団	1.適切な自己理解に基づく志望校の決定 2.進路実現に向けた学力の向上 3.社会人として必要な自立心と協同性の育成	・2年2月進研マークでの志望校(第1志望〜第5志望合算)では、岡山大・香川大をあげる生徒が全体の40.5%となっており、次点の山口大7.3%と開きがあり、地理的に近い範囲での志望校選択となっている。 ・進研模試では国数英総合全国SSは、2年7月53.9→11月53.1→1月53.7→2月53.3と伸び悩みの状況である。全国SS70以上が4名、85以上が23名と難関を目指す層も存在する一方、45〜55に139名と地方国公立大合格一歩手前に大きな集団が存在している。	1.2年次の課題探究での経験や「IO進路探究」での大学学部研究や志望理由書の作成を通して、自分の進むべき道を選択させる。新課程での初年度入試でもあることから大学入試についても十分な理解をさせた上で、自らにあった入試方法を選択させる。 2.主要3教科の完成と情報を加えた6教科体制での学力向上をはかる。授業での取り組みや模試の分析、アセスメントの実施を通して生徒の課題を把握し、適切な教科指導を行う。生徒それぞれの学力把握に基づき進路検討会議での指導方針にいかす。 3.様々な学校行事や諸活動を通して、経験や視野を広げるとともに、よりよい人間関係を築けるように指導する。	・全国を視野に入れ、主体的に志望校が決定できている。 →評価Aの基準:11月の志望校調査において、各自に適した大学を選び、併願パターンが決定できている。 ・自律的に行動し、自分に必要な学習を主体的に行うことができている。 →評価Aの基準:「IO進路探究」で各自が自分に適した学習を計画的にできている。 ・学力状況は2年次末の模試と9月マーク模試でみると、3教科総合ではSゾーンが8名→18名に、Aゾーンでは70名→101名まで増加しており、上位層の学力向上が見られる。一方、Oゾーンは38名→48名と増加しており、後半は入試問題演習を中心にして全体の底上げを図る。 ・IO進路探究では主体的活動を実施した。系統別ゼミ紹介では92.2%の生徒が各自の志望を深めることに役立ったとしており、系統別面談対策講座は88.3%の生徒が「決断実行力」の育成に効果があったとしている。	・2月時点と7月時点での志望校概況と比較すると、第1志望、第2志望に占める岡山大学、香川大学の割合はともに30〜50%と大きな変化は見られないものの、第3志望、第4志望における割合は10%以上減少しており、岡山大学、香川大学以外への視野の拡大が見られる。まだ一般入試における併願パターンがきちんと考慮できていない生徒もあり、指導が必要である。 ・学力状況は2年次末の模試と9月マーク模試でみると、3教科総合ではSゾーンが8名→18名に、Aゾーンでは70名→101名まで増加しており、上位層の学力向上が見られる。一方、Oゾーンは38名→48名と増加しており、後半は入試問題演習を中心にして全体の底上げを図る。 ・IO進路探究では主体的活動を実施した。系統別ゼミ紹介では92.2%の生徒が各自の志望を深めることに役立ったとしており、系統別面談対策講座は88.3%の生徒が「決断実行力」の育成に効果があったとしている。	B	・進路検討会議で各自の志望と学力に応じた適切な受験校を審議した。またその内容を、保護者面談で伝え、受験候補校を決定した。第1志望校については、最後まで諦めない姿勢を尊重しつつも、第2併願以降では学力相応の志望校についても考えさせた。 ・共通テストのデータ分析や検討会議での情報を提供し、最終的な出願先を決定させる。 ・共通テスト後も教科別2次指導や個別の小論文指導を行い、最後まで生徒の学力伸長に努め、全員の進路実現を達成する。	・学力状況はマーク模試9月→11月でみると、5教科総合でSゾーンが12→10、Aゾーンが90→83と減少しており、伸び切れていない現状がある。 ・進路探究プログラムでは「自分で学習計画を立てて学習を行う」項目でやや達成度が低い。受験計画の指導が必要。また2学期は学校推薦型などの個別指導が多く、特別講座等の実施は困難であった。 ・IO進路探究では進路探究プログラムを実施した。目的にあげた「主体的に学習を行う」については97.7%の生徒が「達成できた」「やや達成できた」としており、「IO決断実行力」育成に効果があつたとする生徒は96.3%となった。	B

(3) 安心・安全な学校生活の保障(総合評価: B)

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況(課題)と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	中間期から期末までの取組結果	結果分析と課題およびその改善策	最終評価
生徒課	・基本的生活習慣の確立を図る ・自主性を育てる ・人間性豊かな心を育てる	・学校行事や研修会をととして、生徒の主体的な活動を促し生徒自ら「ルールやマナーの遵守」や「時間の管理」、「けじめのある服装、爽やかな挨拶」など、当たり前のことが当たり前にできる集団をめざして指導を続けており、評価項目で目標値を超えたものはあるものの、評価Aには至っていない。自ら考えた行動が取れるよう、自己指導力の育成を目指したい。 ・昨年度の行事等は、入場制限など若干の制限を設けたもののほぼ予定どおりに実施することができた。総合文化の部、体育の部とともに生徒会と文化委員会、体育委員会が主体となって取り組みを進め、当初の計画どおり生徒主体の活動ができたが、「生徒会活動や委員会活動は活発である」の項目で評価が下がった。生徒会執行部や委員会の活動が生徒に浸透していなかったことが課題であるため、執行部や委員会が中心となって、生徒を動かす機会を増やしていきたい。 ・昨年度は、人権に関するアンケート項目に関しては、肯定的な数値が上昇しているが、SNSを介してのトラブルが依然として見受けられることから、周囲へ配慮した行動が自ら考えてできるよう、指導機会を増やしていきたい。また、引き続きいじめを許さない集団として、日頃からの生徒の変化に早期に対応できるよう校内での連携を密にしていきたい。	・生徒が学校生活を通して、当たり前のことが当たり前にできる集団となるよう、自己指導力の育成を目指し、生徒に考えさせる場面を増やしていく。 ・生徒会執行部の活動を支援することで、部活動や委員会活動、各種行事への主体的な取組みができる人間を育てる。 ・ネットケータイ安全教室やいじめ対策アンケート等を実施することで、互いの人権を尊重し、いじめを許さない集団を育てる。また、面接週間や日頃の関わりの中から、生徒の変化を感じられるような人間関係づくりを目指す。	学校評価アンケート ・「学校行事は充実している」「クラスにおける活動は充実している」の項目で肯定的な評価が85%以上。(A基準:90%以上) → R5(83.2% 89.3%) ・「生徒会活動や委員会活動は活発である」の項目で肯定的な評価が80%以上。(A基準:85%以上) → R5(74.1%) ・人権教育の項目で、肯定的な評価が80%以上。(A基準:90%以上) → R5(82.5%)	・交通ルール・マナーに関しては、地域からの苦情も多く改善には至っていないものの、命に関わることもあるため、生徒への注意喚起や交通立ち番など、引き続き粘り強く指導を続けていく。 ・下校指導を中心に、時間の管理、施設の徹底が主体的にできるよう取り組んでいる。今年中には、習慣として定着できるよう声かけをしていく。 ・銀杏祭に向け、他校と交流することでこれまでの振り返りと課題発見に繋がった。今年度新たに、応募書や審査のQRコード発表など、生徒会主体の取り組みも行われ、保護者や卒業生などの多くの来場者に公開できた。また、「報告祭でのスマホの利用」について、生徒から出た意見から生徒会ルールを作成し、自分たちで考えた規則の中で主体的に行動でき、生徒の自己肯定感に繋がった。 ・いじめアンケートでは、従来の紙からChromebookでのアンケートに変更し、周囲を気にせずに回答できるようにしたこと、いじめ認知件数が増加した。面接週間での聞き取りや教育相談との連携により、いじめを許さない集団を目指していきたい。	B	・交通に関して、注意喚起や立ち番等、継続したものの改善は見られなかった。10月3件、11月5件、12月3件 事故件数(1月末24件、昨年同時期11件) 特に今年度は、通学に慣れない1年生の事故件数が多い。 (24件中16件が1年生) ・「時間の管理」への組織的な働きかけが出来ていない。コロナ以降、遅刻の延べ数が年々増加している。コロナを境に、良くも悪くも無理をしない生徒が増えているように感じる。(R6 12月末 2,354件) (R3 1,738件 R4 2,579件 R5 2,671件)1月末 ・今年度の銀杏祭においては、生徒会主体での新たな取り組みがあったものの、学校自己評価アンケート「学校行事の充実」の項目に関して、生徒の肯定的意見が減少している。事後アンケートの結果をもとに、来年度へ向けた検討も始まった。 ・面接習慣や教育相談室との連携により、いじめの早期発見、対応に努めた。また、人権研修・講演会を通して、自他の人権を守ろうとする意識、意欲を高めた。一方で、スマホ等でのコミュニケーションが増える中で、人間関係が短期間に変化する事例があった。SNSを介してのトラブルは、今年度2件あった。	○学校評価アンケート 生徒評価(肯定的意見) 「学校行事は充実している」 (R6 79.6% ← R5 83.2%) 「クラスにおける活動は充実している」 (R6 85.6% ← R5 89.3%) 「生徒会活動や委員会活動は活発である」 (R6 81.4% ← R5 74.1%) 「人権意識を高めたり、人権問題について正しく学ぶ機会がある」 (R6 81.0% ← R5 82.5%) (課題および改善策) ・基本的生活習慣を確立するために、「時間の自己管理」は大変重要なことであるため、生徒の意識の変化を目指した指導が今後の課題である。 ・新制服になり、来年度が3年目となる。3学年統一した制服にもなるため、全教職員で生徒指導ができる基準の策定とその実践を行う。 ・あいさつ運動が形骸化しているため、生徒の変容目標を立て、根拠を持ったあいさつ運動が展開できるようにしていく。 ・工夫した銀杏祭を更に充実させるとともに、生徒会や委員会を中心とした行事の見直しを図る。 ・SNSの適切な使用についての指導機会を増やしていく必要がある。また、いじめ等に関して、アンケート結果、検査結果だけで判断せず、常に個々に対して、きめ細やかな指導体制を確立していく必要がある。	B
厚生課	・基本的生活習慣を確立させ、健康意識を高め、疾病予防などの自己管理ができるようにする。 ・心身の健康への意識を高める。 ・防災意識を高め、災害時に適切な行動ができるようにする。	・身体計測、各種検診は正しく実施できている。治療指示書の提出率は県平均と比べて十分高い。配布後の個別指示などを適切に行うことで現状を維持していくことが大切。 ・保健LHRは正しく実施されており、生徒の健康意識を高めることにつながっている。講師や実施方法を考えながら、さらなる意識高揚へつなげるような保健LHRを実施する。 ・久しぶりに全校生徒での避難訓練を実施することができた。各地で地震も起こっており、防災意識は高くなっていると思える。今後も万が一の時に確実に行動ができるように真剣に訓練に取り組ませたい。防災冊子はChromebook上での配布となった。いつでも携帯端末から見ることができ、より利用しやすくなっていると思われる。	・身体計測や各種検診を行い、自分自身の健康状態を十分に理解させる。検診結果を伝え、必要なものには治療指示書を渡して通院を促す。 ・講師や実施方法を考えながら、意識高揚へつなげる保健LHRを実施する。 ・防災訓練や防災冊子の作成を適宜見直しを行いながら実施し、教職員や生徒の防災意識の高揚をはかる。	・すべての計測、検査が正しく実施でき、治療指示書の配布や受診指導が十分に行われ、生徒自身が自己管理ができるようになる。 A基準:治療指示書の提出率70%以上 ・保健LHRを実施することで、生徒の健康意識が高まる。 A基準:生徒による健康意識に関するアンケートで肯定意見90%以上 ・状況に合わせた防災訓練を実施し、生徒の防災意識が高まる。防災冊子を完成させ職員へ配布する。 A基準:生徒による防災意識に関するアンケートで肯定意見90%以上かつ防災冊子の完成	・身体計測や各種検診については、すべての計測や検査は正しく行われた。治療指示書の配布や受診指導は十分にを行っているが、治療指示書の提出率は現在までに、眼科・視力検診47.0%、耳鼻咽喉科検診45.9%、内科検診38.1%、歯科検診83.4%となっており、引き続き受診指導を行っている。 ・保健LHRは今後実施予定である。 ・防災冊子は完成しており、すべての教員がWEB上でいつでも見ることができるようになっている。避難訓練について、2回目の訓練では、天候の関係で、グラウンドへの避難や事後のアンケートまではできなかったが、災害時の動きの確認や講話において、防災意識の促進を行った。	B	・通院を促す指示は続けているが、内科を除く各項目は微増にとどまり、大幅な変化はなかった。内科についてはほとんどの対象者が少ないこともあり、変化はなかった。 ・1年2年でそれぞれ保健LHRを実施することができた。生徒の健康意識向上にアンケート結果からも十分に良い影響を与えられている。今後とも細かな部分では見直しを行いつつ、大まかには現状の形で行いたい。 ・指定された形式がありほぼ例年通りの活動ではあるが、ほとんどの生徒は防災意識を高められている。定められた形式の中で工夫を凝らし今後とも万が一に備え、基本的な防災訓練を丁寧に進めていきたい。	・初期の目標である提出率70%は越えられなかった。全体平均でなく、個々の検査、学年を見ると、内科、3年生の提出率がよくない。指示の内容で通院の必要性に違いが出ることもあり、目標も項目ごとに新たなものにしていく必要を感じた。 ・生徒による健康意識に関するアンケートでは肯定的意見が90%を超えることができた。	B

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間期	中間期から期末までの取組結果	結果分析と課題およびその改善策	最終評価
教育相談室	・安心安全な学校生活を送るための支援体制づくりを行う。	・中学校、保護者との連携に努め、入学前の情報収集に力を入れている。（サポートシート） ・発達障害の有無、学校生活で配慮すべき生徒についての情報が得られている。 ・SC（スクールカウンセリング）、心の健康相談など相談機会の調整と実施を行っている。 ・相談室係会での情報交換、学年回へ繋げる。 ・心理検査i-check（全学年）の分析、学年、クラス状況、要支援生徒（注視すべき生徒）の顕在化と共有をしている。	・定期的に月1回相談室係会（相談室長、特別支援コーディネーター、学年主任、養護教諭、学年相談室係、SSW）を開き、欠席状況、SC面談内容等の情報交換、共有。 ・SSWの相談室係会への参加調整、外部相談機関の紹介、注視案件の対処方法など相談。 ・1・2・3年生心理検査i-check（1・2年生は5月10月の2回、3年生は5月の）実施予定、家庭、学校での居場所、その居心地、親子・友人関係の把握、不登校、孤立防止・生徒の自立・自己肯定感を高める援助ができています。 ・生徒課と連携、いじめ防止・早期発見に努める。 ・教員研修（合理的配慮等、教育相談）8月実施。	・サポートシートを活用した中高連携、保護者と情報共有ができています。 ・月1回の相談室係会での情報交換や迅速なケース会議の設定により、問題の深刻化を防止し、担任、生徒、保護者へ心の負担軽減を図る支援ができています。 ・HP等を利用した相談室活動の広報ができています。 ・心理検査（i-check）を用いた生徒把握ができています。親子関係の把握、不登校、孤立防止・生徒の自立・自己肯定感を高める援助ができています。 ・生徒課と連携し、STANDBYの情報注視をすることで、問題の早期発見ができています。 ・職員研修を実施している。	・昨年度末から年度当初にかけて、中学校の先生と新入生「気になる生徒情報」について情報共有する場を設けている。（電話・オンライン・来校）今年度は関係機関との情報共有も行った。その後継続的な見守りが必要な生徒については、関係機関と月一回程度の情報共有を行っている。 ・毎月SC（スクールカウンセリング）を1・2回実施。中間期まで35件前後の相談。 ・スクールカウンセラーや学校医が行うカウンセリング情報を共有している。 ・月1回の相談室係会（7月は毎週実施）において、全学年の注視すべき生徒それぞれの心理的負担軽減を図る支援を多面的に行うことができるよう、情報共有を行っている（SSWも参加）。 ・緊急対応として、「心とからだの健康観察」（7・8月）計6回実施。 ・緊急対応としてSC（7・8月）を計3回追加実施。 ・問題を抱えている生徒についてのケース会議や関係外部相談機関との連携など、各方面から支援を行っている。 ・SC日程など教育相談に係る情報をHPや案メに掲載・送信している。 ・心理検査（i-check）1回目は5月に実施した。生徒の状況把握資料として、本人・保護者に個人シートを配布している。生徒課・担任へも資料を共有しており、一つの視点として参考になっている。 ・生徒課や学年回と連携し、いじめに関する生徒相談をSCに繋ぐなど、早期対応に努めている。 ・8月、教職員対象の校内研修「こころのケア」（講師：スクールカウンセラー大西由美先生）を実施した。	A B	・中学校や児童相談所などへの相談（必要に応じ）や、月1回程度地域こどもセンターとの情報共有を行っている。 ・相談室係会（月1回 7月は毎週）を年間15回実施した。係会メンバー、SSWで学校全体の注視すべき生徒について情報共有を行った。 ・スクールカウンセリングを年間最大回数の計23回実施した。（緊急SCを含む）生徒対応に必要な情報共有のため、コンサルテーションには現在も参加する形をとっている。保護者の相談件数が増えた。（12月末担任 生徒29件、保護者34件） ・問題を抱える生徒について、SC・SSW・学校医（精神科）の先生方からの助言、ケース会議や関係外部相談機関への相談など、多方面からの視点を取り入れながら支援を行った。また、生徒課や学年回と連携し、いじめに関する生徒相談への支援（SCに繋ぐなど）に注力した。 ・「心とからだの健康観察」を、緊急対応として7月8月に計6回実施した。 ・SC日程など教育相談に係る情報をHPや案メで配信した。 ・心理検査（i-check）を、1・2年生は5月10月の計2回、3年生は5月に1回実施した。生徒の状況把握資料として本人・保護者に個人シートを配布した。また、生徒課や担任へも資料を共有しており、いじめの兆候など注視すべき生徒の明確化など、ひとつの視点として参考にした。 ・教員研修「こころのケア」（講師：本校スクールカウンセラー 大西由美先生）を実施した。大西先生からも先生方の様子を知ることができ良かったとの感想をいただいた。 ・「学校評価アンケート」教育相談項目20において、T20においては100%、P14では72.4%、S17では87.1%の肯定的な評価であった。引き続き、「生徒や保護者が相談しやすい場」を目指すとともに、教員間の連携も大切にしたい。	（課題分析） 入学時に発達障害など診断のある生徒も増加傾向にある。年度途中や学年が進むにつれ「起立性調節障害」や「鬱」の症状が重くなった生徒もいる。また、自らの力で他者との関係を改善したり再構築することができない生徒の増加も懸念される。相談内容も多岐にわたり、根が深い。それぞれの特性や事案にあった対応と専門的知識が求められているのが現状である。 （今後強化すべき点） 1.学年回や学校全体で必要な情報は共有すること。 2.支援が必要な生徒についての理解や対応方法など、研修などを通して教職員全体で学ぶこと。 3.不登校傾向にある生徒へのより良いアプローチ方法（遠隔授業を含む）について、個々の生徒に応じた柔軟な対応ができるよう見直していくこと。 4.専門的な助言を得られるよう、SC・SSW・校医の先生方や外部機関との連携を密にすること。	B
事務室	老朽化が進んでいる校舎内の施設、設備、中庭やグラウンド等の敷地内について、県教委の担当課に改修、更新の要望を続けながら、実現可能な事案については改善策を検討する。特に危険箇所の改善や校内美化については積極的に推進するなど、安心・安全で質の高い教育を確保するための教育環境整備を図っていく。	○施設・設備の改修・更新、校内美化等に関しては、校内の改善要望等を確認し、予算を確保しながら、第2棟トイレ改修、浄化槽改修、防火シャッター改修、校内建具改修等の危険箇所の改修事業を優先的に実施し、あわせて校内清掃や剪定も実施した。安心・安全な校内環境が維持出来るよう検討し、県教委に要望を続けているが予算の確保が難しい状況がある。早急に長寿命化改修工事の実施を求め、安心・安全だけでなく快適な教育環境の整備が実現できるよう図っていく。	○施設・設備の改修・更新、美化等に関しては、校内の改善要望等を確認し、随時県教委に要望を出し、予算確保や実現の可能性も検討しながら、危険箇所の改修事業から計画的に改修等を行うとともに、安心・安全な校内環境が維持出来るよう進めていく。	○生徒・教職員の安心・安全な校内環境、学習環境、校内美化、安全確保の改善が図られている。 A基準：年度当初に計画していた以上の整備・改善の成果を上げられる。	危険箇所の把握を随時行い、校内の要望を加味しながら、教育環境の改善をテーマに廊下の改修、テニスコート改修、転落防止柵の設置、図書館の魅力化に伴う改修等を実施した。校内美化にも取り組み、校内草刈り、廊下床面の清掃、トイレ清掃、廃棄物の処分も実施した。今後は体育館照明的LED化を進める。	B	○教育環境の改善、危険箇所の安全措置として、県教委からの予算を確保し、当初の計画どおり、体育館LED化、テニスコート改修、転落防止柵の設置、図書館の魅力化に伴う見せる書架設置、一部ではあるが廊下床面・壁面の改修を実施した。 ○緊急措置の対応として、受電設備の早期改修対応、浄化槽設備の改修予算も確保し、学校運営に支障が出ないように対応した。校内美化にも継続的に取り組み、校内草刈り、計画的な校内床面清掃、粗大ゴミの処分も実施した。	○当初目標としていた老朽化が進んでいる校舎内の施設、設備については、県教委に改修、更新の要望を続け、大規模とはいかなかったが、学校運営、教育環境の改善にはある程度実施出来たと考えられる。県教委からの予算が厳しい中、実現可能な事案については粘り強く説明し、要望を続けた結果と分析する。改善策としては、危険箇所の改善や校内美化については校内からの意見を積極的に聞く場を設け、優先順位を考えながら予算を確保し、教育環境整備を図っていく必要がある。	B

（4）外部から信頼される学校づくりの推進（総合評価： B ）

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間期	中間期から期末までの取組結果	結果分析と課題およびその改善策	最終評価
総務課	・校内外へ向けて、本校が取り組んでいる内容を、わかりやすく発信して、保護者・同窓会・地域社会等との関係性をより強いものとする。 ・中学生にとって魅力が伝わりやすい発信を目指す。	オープンスクールや学校説明会で上映する学校紹介動画を一新した。本年度は、県の教育政策課の「県立高校紹介動画制作事業」も活用し、中学生にとってわかりやすい動画を制作した。 ホームページが新しくなったため、更新方法を熟知するとともに、最新情報を掲載できるようにしたい。 部活動紹介ページを少なくとも半年に1度は更新していく。 学校公式のFacebook、Twitterを活用し、SNSを活用した情報発信も行っており、広報において効果的に機能している。 プレゼン内容は、各課等に協力をいたしながら改訂を繰り返すことで、わかりやすいものを作成できている。 感染症対策を行いつつ、学校説明会を2回、中学校教員対象入試説明会を1回、オープンスクールを2回実施した。今年度は、できるだけ多くの中学生やその保護者にアピールするよう工夫したい。	1 ホームページの充実 (1)学校紹介動画のブラッシュアップ (2)部活動紹介ページを随時更新する。 (3)各学年・各課・各科・生徒会等との連携。 2 各種説明会への積極的な参加と効果的なプレゼンの工夫 3 中学生やその保護者に本校の魅力が伝わるようなオープンスクールや学校説明会を計画・実施する。	1. 部活動紹介ページが随時更新されている。ホームページのどのページも新しい情報に更新されている。 2. プレゼン資料が中学生や保護者、中学校の教員等にとってわかりやすいものになっている。 3. 中学生やその保護者にとって、必要な情報が十分に伝えられたオープンスクールや学校説明会を実施できている。結果、一般入試の志願倍率が過去5年の平均倍率（1.31倍）を超える。 A評価：一般入試の志願倍率が過去5年で最高（1.36倍）。	1. 部活動紹介のページについては、更新されていない部が多い現状である。ブログでは学校行事や部活動の結果などの投稿を行っているが、限られた部などになっている。 2. 主催者の合同説明会にも参加した。今年度は中学校教員と塾関係者の説明会を合同で行い、塾関係者にも授業を見てもらう機会をもった。資料は見やすいという意見が多く見られるが、部活動などの情報をもっとほしいという意見も聞かれた。カリキュラム的な話はもちろんだが、学校生活についての情報をもっと盛り込む必要がある。 3. 2. とも重なる部分はありますが、パンフレットに掲載している内容だけでなく、本校生徒の実際の授業の様子や行事の様子を紹介することが魅力を伝えることにつながるのではないかとと思う。	B	1 ホームページの充実 (1)学校紹介動画のブラッシュアップ 学校紹介動画は昨年度のを継続。 (2)部活動紹介ページを随時更新 特定の部活動しか更新されていない。 (3)各学年・各課・各科・生徒会等との連携。 観客文化の部の時に、玄関と食堂のモニターに模擬店等のPRを流す取り組みを行った。 2 各種説明会への積極的な参加と効果的なプレゼンの工夫 (1)学校紹介のプレゼン内容の再編集 学校案内Join UsをベースとしたプレゼンPPを各課長にも見てもらい作成した。学校の様子が分かるような写真やHPの360° パノラマビューなどを見せるなど、編集を行った。 (2)各分掌、生徒会等との連携 オープンスクール、学校説明会において、各分掌、生徒会との連携を行い実施した。 3 中学生やその保護者に本校の魅力が伝わるようなオープンスクールや学校説明会を計画・実施する 第1回オープンスクールの体験授業・座談会は好評であった。第2回オープンスクールでは雨天のため部活動見学がほとんどできなかった。	1 ホームページの充実 ・ホームページ全体の修正 全体的に構成が複雑であるため、修正を試みる。 ・部活動紹介ページの充実 次年度は、活動の様子の動画を撮影し、掲載する。 ・今年度、PTAのページを増設したため、随時更新を行う。 2 各種説明会への積極的な参加と効果的なプレゼンの工夫 ・中学生はJoin UsとHPを中心に情報を得るため、Join Us、HPを補足する形で、学校の行事や生徒の様子がよく分かる資料の作成を行う。 ・Join Usの構成の再検討を行う。 3 中学生やその保護者に本校の魅力が伝わるようなオープンスクールや学校説明会の計画・実施 ・第1回オープンスクールの体験授業に参加できなかった中学生のために、体験授業の様子の動画をHPにあげることを検討する。 ・雨天時の部活動見学会に変わるイベントの企画を検討する。	B
理数科	理数科の取り組んでいる内容について、理数科の魅力や特徴を校外に伝える。	・学校ホームページの理数科を昨年更新したが、閲覧した人にとってよりわかりやすいページにする必要がある。 ・行事や学校設定科目の様子を中心に、生徒の感想等を盛り込むなど内容を工夫したブログを発信してきた。しかし、日頃の授業の様子などは発信できていない。	・学校ホームページの理数科のページを閲覧した人がわかりやすいものに更新する。 ・理数科の様子を行事や学校設定科目に加えて、日頃の様子なども学校ホームページのブログで発信する。	・学校ホームページの理数科のページを閲覧した人がわかりやすいものに更新されている。（A：改訂されたページを閲覧した人のうち80％の人がわかりやすくなったと答える。） ・学校ホームページで理数科の記事のブログが年間15回以上発信されている。（A：20回）	・学校ホームページの理数科のページを閲覧した人がわかりやすいものに更新した。 ・理数科の様子を行事を中心としてブログを10回更新した。今後は、日頃の様子なども発信する予定である。なお、ブログの文字数制限があったため、生徒の感想は盛り込むことが少なかったが、今後は制限がなくなったため、感想等も記事に入れる予定である。	B	・理数科の様子を行事を中心としてブログを5回更新した。ブログの文字数制限がなくなったため、生徒や保護者の感想等を盛り込んだ記事にした。記事の内容は、読んだ人が理数科に興味を持ち、理数科で学びたいと思うように工夫した。	・理数科のページを昨年よりもわかりやすいページに更新したが、もっと魅力的なページにすることを求める声もある。教員ではなく、業者等の専門家に内容、構成等を依頼することも必要だと考える。 ・ブログは合計で15回発信した。行事や学校設定科目の様子を中心に、生徒の感想等を盛り込むなど内容を発信してきたが、日頃の授業の様子などは発信できなかった。理数科係内で輪番制にして記事を作成することも考えられる。	B
地域連携担当	地域の環境美化、防災、教育支援等へ貢献するため、町内会や公民館、近隣の小中学校との連携を強化し、生徒の決断実行力育成につなげる。	・一宮公民館をとおして他の施設や団体との連携を深めることができています。現在行っている活動を増やすことは難しいことから、一つ一つのプログラムを充実させていくことが重要である。 ・課題探究においては、地域の課題解決を目指した研究が少なくないことから、継続研究の推進やテーマ設定時での指導が必要である。	・一宮公民館との連携を核として、町内会や地元小中学校との連携を推進する。 ・地域の課題解決に向けた課題探究の推進を図る。	・地元の町内会や小中学校との交流ができる。 ・地域の課題解決を目指した研究や研修講座が実施できる。 評価Aの基準 ・防災や教育支援などの取り組みが地元町内会や小中学校と連携してできる。 ・地域をテーマにした課題探究で、課題解決に向けた取り組みが地域と連携してできる。	・夏季休業中を中心に、一宮公民館と連携し、地域の方を対象とした「防災ボランティア養成講座」や「パソコン講座」、また小学生を対象とした講座を実施し、地域の方や小学生と交流することができた。多くの参加生徒の感想には、充実していた内容のコメントがあり、生徒の成長につながる連携ができています。 今後は、新たな連携や取り組みなど、更に充実したものにしていきたい。	B	・一宮公民館との連携が継続的にできている。今年度は、一宮高校へ地域の親子10組を招いた料理教室を開催、また社会貢献活動として、地域小中学校での防災教室の実施など、新たな取り組みも行い、異年齢との交流を通じてコミュニケーション力、決断実行力の育成につなげた。 ・3月には普通科課題探究の地域をテーマとしたグループによるポスター発表を行い、地域の課題解決に向けた地域の方との交流も進める。	・一宮公民館との連携を核として、町内会や地元の小中学校、地域の施設等との連携ができた。地元中学校との連携はできなかったものの、今年度は新たな取り組みも行い、生徒の成長につながった。来年度は更に連携を強化し、生徒の活躍の場の提供に努めたい。（別紙参照）	B

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	中間期から期末までの取組結果	結果分析と課題およびその改善策	最終評価
(5) 教育体制の整備・拡充（総合評価： B ）									
担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	中間期から期末までの取組結果	結果分析と課題およびその改善策	最終評価
事務室	事務職員としての学校運営や財務等の専門性を活かし、学校が抱える喫緊の課題と県教育行政の動向に対応しながら、普通科・理数科の魅力化への取り組みや魅力発信が実施出来る学校を支える柱の一つとして事務室を位置づけ、学校経営目標・計画達成のために各事業に参画しサポートを行っていく。	○県費や団体会計を有効に運用し、教育体制に影響が出ないよう運営していく。また、学校の魅力化や情報発信のツール提供する。 ○学校徴収金については、生徒に対する還元であることをを念頭に置き、説明責任が果たせるよう有益な執行を行い、適宜、執行状況の確認を行っていく。 ○教職員だけでなく風通しのよい事務室環境を構築し、来校者や生徒に対しても丁寧な対応ができる体制づくりを図っていく。 ○生徒の快適な学習環境の整備を引き続き行っていく。	○ICT機器を利用し学校の魅力化や情報発信が出来る環境を整備する。 ○適宜、学校徴収金収支状況を複数で確認することなどにより、適正な執行と確認を行っていく。 ○教職員、生徒、外部訪問者を問わず、丁寧に説明し、担当業務について適切な対応ができる事務室環境を目指す。 ○普通教室・特別教室、廊下階段を中心に生徒に不便を感じさせない学習環境づくりを行う。	○ICT機器を活用しあらゆる場面で情報発信ができる環境が出来ている。 ○生徒への還元と保護者が疑義を生じない執行体制を維持する。 A基準：予算の執行について、明確に回答することができる ○事務室と教職員・生徒等の間に相互理解ができる環境が構築できる。 A基準：全職員から相談しやすい事務室と認識されるようになる。 ○各教室等の環境の整備が整う。 A基準：学校評価アンケートにおいて要望(施設・設備を除く)がでなくなる。	○ICT機器を利用し広報用のサイネージ発信を実施し、年度末に向けて情報発信機器の整備と運用の準備をしている。 ○学校徴収金については、定期的な複数による定期確認を実施し、適正な事務処理をしている。 ○各事業を実施するにあたり、実施内容の確認を随時行い的確なタイミングで対応出来ている。 ○老朽化著しい施設・設備については、随時果に対して予算対応の要望を行っている。校内環境を限られた予算の中で清掃や機器の更新を実施し、年度末に向けて備品類の更新を継続する。	B	○情報発信が可能な配信室やICT機器を整備し、運用を開始した。 ○学校徴収金については、生徒還元の出来る予算へ再構築し、定期的な複数による定期確認も継続して実施して適正な事務処理をしている。 ○各事業を実施するにあたり、実施内容の確認を教務へ行い、事後処理とならないように対応出来ている。 ○老朽化著しい施設・設備については、随時、県に対して予算対応の要望を行い改修・整備を進めている。また、緊急事業が想定される施設・設備(受電設備・放送設備・浄化槽設備等)の多額の予算がかかる事業についても要望を行い対応することが出来た。校内環境を限られた予算の中で清掃や機器の更新を続けており、シューズロッカーの更新も出来た。	事務職員として学校運営に参画する意識を持ち、その財務等の専門性を活かして各目標に取り組んできた。情報発信が出来た学校、学校魅力化をテーマとし、学校が抱える校内施設・設備の老朽化への対応、情報発信が出来る環境整備への対応について、目標としていた取り組みは出来たと分析している。課題としては本校が求めているものは何かと言うことを多くの職員やPTA等と意見交換しながら継続できる取組を進めていくことが必要と考える。	B